

『怒りのぶどう』のオクラホマをゆく

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重松, 宗育 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008666

『怒りのぶどう』のオクラホマをゆく

重松宗育

ジョン・スタインベックの『怒りのぶどう』に魅せられて、筆者は、大学の教壇に立って以来、しばしばこの作品を講義のテキストに使ってきた。もう15回を超えただろう。にもかかわらず、あえて論文のテーマとして取り上げずにきたのには、明快な理由がある。それは、一読者として、好きな作品を好きなように楽しみたいという思いからであり、ディレクターの自由な立場を守ろうとしたためである。

『怒りのぶどう』は、他の偉大な文学作品と同様に、読者の視点に合わせて様々な姿を見せてくれる。スタインベックが自ら言うように、この作品には「五つの層」があり、どの層を読み取るかはすべて読者の力量にかかっている。筆者は、この作品を支える「思想」と、それを表現する「文体」をこよなく愛している。ケイシー、トム、マアの人間的成熟には、自らの内的体験を重ね合わせてきたし、また、中間章と物語章の絶妙な関わりは、「抽象と具象」、「個と全体」という禅の視点に、少なからぬ示唆を与えてくれた。そして、いまだに読み返すたびに新たな発見があり、一読者として、読書の感動と醍醐味を堪能している次第である。

加えて、記録文学でもある『怒りのぶどう』には、もう一つの楽しみ方が考えられる。作品の舞台に実際に自分の足を運び、作品に登場するあれやこれやを自分の目で確かめることにより、作品の理解を深めてゆく読み方だ。まさに「百聞は一見にしかず」である。

筆者は、作品に登場する町のほとんどへ足を運んだ。オクラホマ州内の地はもとより、「ルート66」に沿って、オクラホマ州、テキサス州、ニューメキシコ州、アリゾナ州、そしてカリフォルニア州まで車で走った。「ルート66に沿って」というのは、時間の制約から、実際の「ルート66」ではなく、大半はそれ

に沿って作られたインターステート・フリーウェイ40号線を走ったからである。オクラホマ州（サリソー）からニューメキシコ州（アルバカーキ）までは2度走った。1993年に走破した時は、前年がルート66開通の66周年に当たっており、道筋の各所に立てられていた新しい道標が印象的であった。

四半世紀にわたり、『怒りのぶどう』に対してこのような関わり方を続けてきたために、筆者の手元にたまった資料は相当の分量になる。以下の紹介は追体験の旅で残したメモに基づいたもので、文学の楽しみ方の一例である。

さて、『怒りのぶどう』は、内容面で3部に分けることができる。まず、ジョード一家が、砂嵐により故郷のオクラホマ州サリソーを旅立つまで、次がカリフォルニアに至るまでの旅、そしてカリフォルニアでの出来事である。本稿では、オクラホマ州を横断する旅に焦点をしぼり、オクラホマ州東端のサリソーから西端のテキソーラまでの範囲で、作品に関わる背景を扱うことにする。

(1) 「赤土地帯」と「灰色地帯」

『怒りのぶどう』の冒頭には、オクラホマの「レッド・カントリー（赤土地帯）」と「グレイ・カントリー（灰色地帯）」という言葉がある。「レッド」と「グレイ」は、この作品に深く関わる象徴的な色であり、著者スタインベックは、明快な意図をもって冒頭に使ったに違いない。

「グレイ・カントリー」に当たるのは、オクラホマ州の西部（テキサス北部に接する「パンハンドル」を除く）の南北に帯状に広がる「ジプサム・ヒルズ」（石膏丘）と呼ばれる地域だろう。この一帯では、地表に15から20フィートの石膏が積もっており、「グレイ・カントリー」と呼ぶのにふさわしい。

また、「レッド・カントリー」に当たるのは、オクラホマ中部地域を南北に帯状に広がる二つの地帯、西側の「レッド・ベッド・プレインズ」（赤土平原）地域と東側の「サンドストーン・ヒルズ」（砂岩丘）とであろう。オクラホマシティは、「レッド・ベッド・プレインズ」に含まれ、タルサやマッキヤレストーは、「サンドストーン・ヒルズ」に位置する。この地域は肥沃で、農業に

も牧畜にも最適の土地と言える。

この辺りでは、地表がむきだしになった一帯に立っていると、一面の赤レンガ色の土に圧倒される感があり、未舗装の道路などは、まさに赤レンガを敷きつめたかのように見える。

(2) 「ダスト・ボウル」と大恐慌

「ダスト・ボウル」は、砂嵐の被害を受けた地域をさす。

アメリカ中西部、南西部一帯の大草原は、かつて先住民インディアンの生活の場であった。しかし、白人移住者が住むようになってからは、農地として、次々に開墾されていった。主として小麦などを生産するためだったが、農業の機械化が進むと、飛躍的に効率よく開墾されるようになり、小麦畑が広がっていった。しかし、それは、大地の表土を包み込んでいた大草原が、急速に失われていったことを意味する。

作品の第4章で、トム・ジョードが言う。

「じいさんがいうにゃ、この土地は、最初のうち 5回ぐらい耕すあいだはよかったということだぜ。野草がまだ生えていたあいだはな」

(ペンギン版原作、37頁。以下同じ)

天候に異変がなく、作物が順調に育っている間はいいとしても、いったん旱魃になり、強い風が吹きまくるようになると、細かく砕かれた土は、埃となって宙に舞い上がってゆく。

実際、1930年代には、旱魃と強風が重なって、砂嵐がおこり、アメリカ中西部、南西部一帯を襲うことになった。この災害により、農地は砂の下にうずまり、農業を続けることは不可能になった。ただ、この災害は、あえて人災と言わざるを得ない面がある。かつて、先住民たちが、大草原の生態系を守って生活していたのに対し、白人開拓者たちが大草原を農地化したことに主な原因があるからだ。

さらにそこへ不幸が重なった。1929年、ニューヨークを発端として、大恐慌が全米を襲った。それにより、小規模の農民や小作人（シェアロッパー）は、大資本家である銀行に土地を追われ、難民と化すことになった。こうして、アメリカ中南部の多くの州から生まれた難民が、仕事と生活の場を求めて、ルート66を通してカリフォルニアへ向かったのである。

(3) サリソー

ジョード一家の出身地がサリソー近郊だという事実は、ジョード一家の乗ったハドソンが「サリソーでハイウェイに出て西に頭を向けた」（13章冒頭）という文章からも分かるし、また家族たちが何度かサリソーの名を口にする場面がある。

サリソーは、オクラホマ州の東の端、セコイア郡の中心の町で、隣りのアーカンソー州との境までは、わずか25マイルほどの距離にすぎない。人口は7,122で、東西方向に走る64号線と南北方向の59号線との交差点周辺に位置する田舎町である。64号線のすぐ南を平行してインターステート40号線が走っており、また町の中を鉄道も通っている。

サリソー南方には、カンザス川が流れていて、その低地帯は「プレイリー・プレインズ」と呼ばれている。さらに、町の北東方向は、クックソン・ヒルズからオザーク丘陵へ広がる豊かな森林地帯があって、明らかに、サリソーは森の中の町という印象をもつ。だから、農業には適した場所であり、ジョード一家は、このサリソーの近郊に住む小作人という設定である。

ただし、実際にこの「ダスト・ボウル」に含まれたのは、オクラホマ州の場合、中西部以西に限られており、サリソーはほとんど影響を受けてはいない。

オクラホマの新聞、「タルサ・ワールド」（1992年9月6日）には、次のような記事が載っている。

ジョン・スタインベックの『怒りのぶどう』から受ける一般的な印象とは違って、1930年代の「ダスト・ボウル」と大恐慌の時代に、オクラホマ州

が空っぽになったわけではない。

スタインベックは偉大な作家だったけれども、地理のことはさっぱりのように、と地元の人々は指摘する。サリソー商工会議所のジョン・エルウィック氏によれば、「ダスト・ボウル」はオクラホマ西部のことで、何百マイルも離れた、この森に覆われたクックソン・ヒルズは関係なかった。

かつて『怒りのぶどう』が出版された当時は、各地でこうした反論や非難が渦巻いた。しかし、多くは、自分たちの故郷を悪く書かれたことへの感情的反発からきており、「一行も読んだことはないが、本に書かれていることは、みんな嘘っぱちに決まってる」といったものだった。この辺の事情は、マーティン・ショックリーの論文「オクラホマにおける『怒りのぶどう』への反応」（1944年）に詳しい。

ただ、どうしても疑問なのは、スタインベックが、作品を書く前にオクラホマの状況を実地調査しているのに、なぜ、歴史的事実に反してまでサリソーをジョード一家の出身地に選んだのか、である。この点が気にかかっていた筆者は、サリソー郊外について、ことさらに注意深く観察したものの、この疑問はさらに深まる結果となった。あえてサリソーを選ぶことに、何らかの文学的効果を期待したとも思えないし、単なるスタインベックの勘違いとすると、あまりに初歩的なミスと言わざるを得ないからである。

ちなみに、近年、サリソーの町では、秋に「怒りのぶどう」祭りが催されるようになった。かつて反発の対象だった『怒りのぶどう』が、今や祭り（観光目的？）のテーマとなるのは、過去を知る人たちは、いったいどんな思いを抱いていることだろうか。

ちなみに、サリソーの郊外にはセコイアの家が保存されている。セコイアは、チェロキー・インディアンの指導者であり、チェロキーの文字を作った人物として有名である。1838年から翌年にかけて、チェロキー・インディアンの人々が、ジョージア州から、いわゆる「涙の道」を歩いて強制移住させられた時、彼らに与えられた最南端の土地が、このサリソーを含むセコイア郡であった。

(4) 土亀 (ランド・タートル)

『怒りのぶどう』の象徴として登場する土亀は、第3章できわめて印象的に描かれている。

一匹の土亀が、あてどもなしに向きを変え、高い丸屋根のような甲羅を草の上にひきずりながら、はっていた。……角のような口先は半ば開いて、人間の爪のようなひたいの下のたけだけしい、おどけた目が、まっすぐ前方を見つめている。(20頁)

筆者は、土亀を二度、みずからの目で見える機会をもった。一度は未舗装の野の道で、二度目はハイウェイの路上だった。思いがけぬ出来事であり、感動の瞬間であった。

タルサ近郊のハイウェイを走っている時のことだった。前方の道路の上に、何か黒っぽいものが見える。石でも落ちているのだろうと、スピードを落としながら近づき、間近に見てあっと驚いた。土亀なのだ。第3章のあの土亀が目の前にはいるではないか。道路を横切ろうとして、その真ん中で一休みしているかのように見えた。まさにスタインベックが活写したそのままの姿で、甲羅の直径は、20センチほどの大きさだった。

筆者は、思いがけぬ出会いに感動して、車を止め、それから1時間ほど、土亀と時を共にした。

(5) サリソーからチェコタへ

カリフォルニアへ向かう準備をすべて終えたジョード一家は、朝早く、サリソーを出発して西へと向かう。

サリソーからゴアまでは21マイル、ハドソンは時速30マイルで走っていた。ゴアからウォーナーまで13マイル、ウォーナーからチェコタまで14マイル。(13章、167頁)

サリソーからウォーナーまでは、64号線を走ることになるが、これが、ジョード一家が通ったハイウェイと考えられる。サリソーからヴィアンを通りぬけると、次の町はゴアである。人口わずか 690だが、かつてチェロキー・インディアンの西部の拠点となった所であり、チェロキー・インディアンの法廷跡が残っている。

ゴアからウォーナー(人口1,479)まで行くと、64号線は北へ折れタルサ方向へ続くので、そこからは 266号線をチェコタ(人口 3,290)まで西進する。

(6) マッキヤレスターとショーニー

物語では、チェコタを通り抜けて西へ向かうが、この町は南北に走る69号線との交差点でもある。

この69号線を南へ向かうと、マッキヤレスターがある。人口は 18,400。この町は、1870年、J. J. マッキヤレスターがチョクトウ・インディアンの領土内に交易所を作ったのが始まりで、その後、石炭鉱が発見され、現在のような商業の中心地へと発展した。

マッキヤレスターには、主人公トム・ジョードが、殺人の罪で服役したことになるオクラホマ州立刑務所がある。『怒りのぶどう』の物語は、トムが、この刑務所で4年間暮らしたあと、仮釈放になり、故郷に戻るところから始まっている。

刑務所の場所は、町の西端、ウェスト・ストリートの西側一帯である。周囲は高い鉄条網に囲まれて、ものものしい雰囲気漂っている。1993年夏、筆者はそこを訪れた。そして、不注意にも刑務所の門の傍まで車を乗りつけて、門衛にとがめられてしまった。それでも、『怒りのぶどう』研究のために、はるばる日本からやって来た旨を説明して、何とか了解を得ることができた。その門衛によれば、当時、全米から千数百人の重要犯罪人が収監されていて、その内の数百人は極刑の犯罪者ということだった。その他、囚人たちの日々の生活など、興味深い話が聞けたのは幸いだった。

ショーニーは、オクラホマシティに近く、その東方30マイルほどの位置にあ

り、インターステート・フリーウェイ40号線の南側にある。人口 26,017で、トム・ジョードがダンスパーティで殺人を犯したという町である。

(7) ヘンリエッタからオクラホマシティへ

チェコタからヘンリエッタまでは長い道のり—34マイルだが、その果てにはほんものの町がある。ヘンリエッタからキャスルまで19マイル。

(13章、167頁)

さて、ジョード一家は、チェコタからヘンリエッタ（人口 5,872）まで西へ向かう。このヘンリエッタからは、マッキヤレスターへ南下する別のルートがある。このルートでは、インディアン・ネイション・ターンパイクを通り、約45マイルの距離を走れば、マッキヤレスターに着く。ちなみに、この名前は「キャ」にアクセントがある。

ヘンリエッタから、62号線は、しばらくインターステート・フリーウェイ40号線に合流するが、また別れて西へと向かう。次のキャスル(人口 94)は、ほんの小さな集落で、道路から離れ、木々の茂みの奥にあるので、気づかずに通り過ぎてしまう恐れがある。(事実、初めて訪れたおりには、気づかずに通り過ぎてしまった。)

地方の古い幹線道路は、その地域の住人たちに長いこと使われてきており、人々の日常生活に密着している。だから、道路と人間の集落との関係が浮かび上がってきて、興味深いものがある。64号線や62号線に限ったことではないが、田舎道を走っていると、ほとんど同じパターンが繰り返されていることに気づく。

はるか彼方へと一本道が続く。野原や林を走りぬけ、単調な景色の中をひたすら進むと、やがて前方に集落らしいものが見えてくる。そして、近づくにつれ、それは形となって現れてくる。まず町外れから人家が並びはじめ、次第に集落の中心らしい「ダウンタウン」に至る。通りには、食料品店やガソリンスタンドなど、一つの町を構成するのに欠かせないものが並ぶ。そうした建物

の多様性によって、その集落の規模は見当がつく。信号のついた十字路があれば、その集落は、沿道だけでなく、ある程度の広がりをもつ、より大きな規模の町を意味する。そして、銀行やら郵便局などの並ぶダウンタウンを過ぎれば、また町外れに近づき、自然の風景が広がってゆく。

キャスルから25マイルほど走れば、ペイドン(人口 400)に至る。ペイドンは、64号線、62号線沿線の典型的な集落で、道の両側に数十軒、家や店が並んでいるだけだから、車では、あっというまに通り過ぎてしまう。

ペイドンの近くの道ばたに、小屋が1軒あって、その前に2台のガソリンポンプがあり、そして柵のそばに、水道の蛇口が1つとホースが1本あった。(13章、170頁)

事実、現在もペイドンの東のはずれには、1軒のガソリンスタンドがある。作品に符号する「ペイドンのガソリンスタンド」ということで、筆者は、車を降りて、トムがスタンドの男と話を交わした場面を追体験してみた。ただその時は、スタインベックの实地調査した頃からのガソリンスタンドかどうか、尋ねる気にならなかった。が、後になって後悔した。もし古くからのものだったら、さらに好奇心がわいたに違いないからだ。

ペイドンからミーカーまで13マイル、ミーカーからハラまで14マイル、するとオクラホマシティ—大きな都市だ。(13章、180頁)

ペイドンの次の町(プラーグ)を過ぎてミーカー(人口 1,003)に至る少し手前に、赤土のむき出しになった地域がある。そこで筆者の見た光景は、まさに作品の冒頭に描かれた「傷跡だらけの大地」そのもので、一面に広がる赤土が乾き、「大地の表面はうすい、かたい殻をつくり」、亀の甲羅のようにひび割れた土の塊が、一つ一つ表面の皮がむけて、反り返っていた。目指すものを見つけた喜びのあまり、不審そうに見守る人々に囲まれながら、夢中で写真を撮り

続けたことが思い出される。

ミーカーからさらに西へ進むと、ハラ(人口 4,206)に至る。ここからは、道路も上下二車線になり、周辺の雰囲気から都会に近くなった感じがする。この辺りは起伏がはげしく、オクラホマシティに向かって、道路がはるか彼方まで波打っているように見える。

そして大都会、オクラホマシティ(人口 444,719)で、62号線は、北のタルサからオクラホマシティまで南下してくるルート66に合流する。

(8) ベサニーからテキソーラまで

作品中には「オクラホマシティからベサニーまでは14マイル」とあるが、これは、オクラホマシティのどこから計った数字なのか、が問題である。

ベサニー(人口 20,075)は、オクラホマシティの西側に隣接する町で、ほとんど分かちがたい。かつては、両者の間にある程度の自然空間があったに違いない。現在では、家並みが完全に連なっており、オクラホマシティの一部のように見える。ルート66はこのベサニーを通り抜け、町の西端は、ノース・カナディアン・リバーの一部、オーバーホルサー・レイクに接している。

彼らはベサニーをぬけて、町の反対側へ出た。排水渠が道路の下をくぐっている掘割りに、一台の古ぼけた旅客用の車がハイウェイからはずれたところにとめられていて、そのそばにテントが一つ張られ……。 (13章)

筆者は、この描写にぴったり符号する場所を見つけた。

ノース・カナディアン・リバーには、古い鉄橋がかかっているが、これはルート66の旧道の一部として今も残る橋だ。どうやら、その橋の辺りがスタインベックの抱いたイメージかも知れない、と筆者はにらむ。橋の東側は、道路の南側に公園が広がっていて、たぶん当時でも車を止めるという設定にふさわしかっただろうし、道路の北側には排水渠も、掘割りもある。

このテントにいたのは、カンザス州の東南の町ガリーナ(人口 3,308)から

やって来たウィルソン夫妻であり、カリフォルニアを目指す仲間として、ジョード一家にとり、はじめて行動を共にする人々であった。その最初の出来事となったのが、じいさまの死であり、ウィルソン夫妻の好意的な協力によって、じいさまを弔うことができたのである。

ジョードとウィルソンの家族は、一つの単位となって、のろのろと西への旅を続けた—エルリーノにブリッジポート、クリントン、エルクシティ、セア、そしてテキソーラ。ここに州境があり、オクラホマは背後になった。(16章、222頁)

ベサニーを離れ、ルート66をさらに西へと向かうと、ユーコンを通過してエルリーノに至る。この町の人口は15,414だから、かなりの規模だ。

サウス・カナディアン・リバーを渡ってブリッジポート(人口137)までが18マイル、そこからクリントンまでは37マイルの道のりである。クリントンは人口9,298の町で、フリーウェイの周辺にも見事な赤土が広がっており、赤一色の風景は、鮮やかで目にくっきり焼きつく。さらに24マイル西進すると、エルクシティ(人口10,428)がある。次が12マイル西のセア(人口2,881)で、町の中をレッド・リバーの支流が流れている。

そして、西へ21マイル走ると、オクラホマ州最後の町テキソーラ(人口45)で、ここが文字通りオクラホマ最後の地点となる。ジョード一家にとっては、まだほんの序の口にすぎず、これからテキサスを通り抜け、ニューメキシコ、アリゾナ、そして、カリフォルニアへと向かう長い旅が続くのである。

[注]

1. 作品からの引用は、岩波版『怒りのぶどう』（大橋健三郎訳）によるが、町の名前の表記を変えたところがある。また、頁数はJohn Steinbeck: *The Grapes of Wrath* (Penguin edition, 1992)の頁である。
2. 各都市の人口は、American Automobile Association から出ている1995年版 *Road Atlas* (United States, Canada, Mexico) によった。

[参考文献]

- American Automobile Association: *Tour Book*, (Arkansas, Kansas, Missouri, Oklahoma; 1996)
- French, Warren: *A Companion to The Grapes of Wrath* (The Viking Press, 1963)
- Ganzel, Bill: *Dust Bowl Descent* (University of Nebraska Press, 1984)
- Morris, J. W. et al: *Historical Atlas of Oklahoma*, Third ed. (University Press of Oklahoma, 1986)
- Rittenhouse, Jack D.: *A Guide Book to Highway 66* (University of New Mexico Press, 1990)
- Scott, Quinta: *Route 66: The Highway and Its People* (University of Oklahoma, 1988)
- Snyder, Tom: *The Route 66 Traveler's Guide and Roadside Companion* (St. Martin's Press, 1990)
- Steinbeck, John: *The Harvest Gypsies* (Heyday Books, 1988)
- Svobida, Lawrence: *Farming the Dust Bowl* (University Press of Kansas, 1986)
- Wallis, Michael: *Route 66: The Mother Road* (St. Martin's Press, 1990)
- Wilson, Steve: *Oklahoma Treasures and Treasure Tales* (University of Oklahoma Press, 1976)
- 東 理夫・菅原千代志『荒野をめざす』（研究社、1994）
- *とくに、Warren French の *A Companion* は、文学研究上の重要な参考文献であり、'The Reception of *The Grapes of Wrath* in Oklahoma' (Martin Shockley) など、本稿に関連する論文が収録されている。

『怒りのぶどう』のオクラホマ地図

